No.745B.
1805
VOL 2/3
佛

澄禪和尚行狀記 中

此標題
高貴御
筆貶之
擬證誠

澄禪和尚行狀記中

師吉水に清き流きに浴し給ひ。一生色欲乃汚きを恥く。禁行潔くして。斷末摩に待珠を法を行ひ給ふ。二度ゟ乃度毎ゟ。二千顆に珠を。加持したまふに。其待珠空中に忽然として悉く飛揺し。右に遶り還。左りに廻ぐり。終ゟ空中に凝まて。昭然として順逆中に三道法を成じ給へる。壹弦弘なり。此乃壹

九曜文庫

待を拝服し。正会往生を願ひ掌。祀をするに
遑あらざる。上来なのもとされ中に近てさ比現世乃
人をいとゞ。勢州皇子江浦小川氏乃母尼安貞享
保三年れ秋。師れ新末摩乃待珠を拝服し
一七日を期して。如法よ百万遍念仏を勤行
ひ。第五れ日没乃比。忽然として西乃空よりわ
うれ圓三尺計れ金色の蓮華。尼れ目前に現
に飛来すると尼て。歓喜雨涙し。暫時乃頃牙

を地ふ投じてあとさ。泥をなぐれどいけしゝ
あとれくなりぬ。又第六七日両日れ夜。寂と
してうしろ乃比。念仏を勤し時。其屋
上にのゝあて。数多れ人とおゞし。通猛乃
ゝ相和して。ぬ大するを火にをゝげうゝ公
をすこゝちして。身れ毛もよゞち。仰ぐ
位を催し。かゝる威験乃あることも。皆
師乃法れいるに所ありと感喜したまく

餘暇を得。やゝ半ち出るなれうさも忘れて同じ廿四年三月二十五日に大原山にまうでゝ。師よりこゝ拝謝し。今いく程もあるまじき命ぞうと。一佛土は再会を。会時に結びまわて。帰郷しまるに翌乃歳初春月より。病ふそゝ。いゝゝこなすやまびらきもゝ聖衆乃迎を待こと且夕よあるを。悦び勇ゝ会佛相續しまるゝ。三月八日

乃夜。うりゝ仏ふ。沛長七八すれ弥陀乃真容を拝し。同十二日。夢見にあゝびゝゝ現に。沛長一尺四五寸計乃真身れ。沛佛を瞻仰し。慶喜まるに。まる同十六日にも。来現先れごを。同十八日。看侍乃人ふ告て曰。今此家内乃動揺まるを。地震とゝれ思ひそ。是まゝ。又あゝゝるれ来賜したまゝん先瑞なり。也いゝ。云れ業乃下まゝ。指さゝ志ゑし。只

今まさらせんまつよりやあれこそやあらんとや誰くも
ぬうづさまやあらや是此佛来迎をと悲喜交流
し合掌して涙ハ眼病乃者その如来れ佛長ハ
いうむと同よ。當境悟真寺れ釈迦如来丈六坐像
ようを。往大身にて。光明あるうを照し給ふ
といひ。同十九二十れ日ごろに。大身れ弓容
をあらしなることや。前より同じ。同廿五日乃辰
ばむうへくいきく。去年れ今月乃ちよ。澄禅

大和尚ハ値遇しをうく。勝縁を結び日を
免ぐり来れる。和尚もあくれとそうれを
おり同て。今日如来と共に来りつ。迎へさ
せ給ひねと。祈求しをるうれ歓慕れ色面に
溢。病苦もれくて。同来乃子の刻。頭北面西ハ。
孫をうぐれどうく。会仏とともに。神ふるうばい
とく息絶ぬ。

○爰に又駆通大会仏日課百巻れ勧化ハ。六百年

前弥陀乃直授を。良忍上人感得し給ひし
ふ。往て鞍馬に詣し毘沙門天王荷擔まして。諸
天善神八百萬乃神ぐを。すく給ひしよりの。
鳥羽上皇御随喜おそ〳〵ほ。女院百官士庶
人に及ぶまで。入舎され結縁こそて其益ま今
いまに退転なし。然れども。往昔に比すれば甚
微こなる故。余是を歎こそて。興さむ興る法令
ぞ小と。勇志をおこに感發し且退く思惟すらく。

先跡ふよりぞ。いまや高貴乃御入舎ある
にあらむ。廣大なるまぐとよりいく
鞍馬にまうで。静に法施をもうく。護法天
王に祈求に。其發願に曰。凡世人乃希望ふを
きるに。名をあぐ。福壽をまし。子孫長から
むまを。求るかに。今余が願に所ハ彼に異
なり。入金法に為ふして。願に為ふ世ば。衰脆
賢したまへ。そを助通会佛乃善巧。古今倚

号天は冥乃加力によれるか。何ゆえ。盛衰
時運よ楽びといへども。今あんぢかくも法
燈乃消ぐてよなるもしやと。我ちらばかてち
欲きて。死くも当今堂上は沙入去れち
ゆし。且當山乃流徒。随喜入舎して。萬國ふ
流布せん事を住ぜ免きまへ。此願成ぜば。
速よ命を頂にとも。命上菩提誓願乃
海中に投歸して。孫るを本意なれば。海

面うらばと黙禱しまるに。天王善願ふ免こと
しぢかるや。幾とせ乃後ふ果して。密願の
花開こを得て。享保二丁酉乃歳五月十五日
にかきまくも尊やごとれき高貴百官
号沙入去れちゆし。法運時よ循環を。
まつく此日ハ。孰通用基六百年前乃丁酉
五月十五日に。直授しぢひく。星霜かわ
あとハ今。十干十二ちゆ。其月も日を。正當六

百年に符合せる。是宿因孫なるべく。豈偶然なるむや。上来演るごとくや
ごとなきこと共と。市同行に結びまる
も。偏ふ毎上功涂れ会佛の加まわと入会
乃人も。甚歓喜し給へり。況此結孫共
諸人現世ふ。天神地祇乃護念あづか
く。一切れ願望を成じ。後生ふ必浄刹ま
往生しく。佛果圓満乃位よりぐらん事。

うづひる。此事実。勢通大会佛略孫
起を著述し刻く。世ふ流行せ。別ふ鞍馬ち
孫起和讃。又勢通大会仏再興述意（此書来板行せば）等
有。且奇なる。勢通会れ。将今日昔よかへる法
光れ。時運来いくらねうの先より。家了伝
来せる。勢通大会佛れ本孫起二巻（内書ハ青蓮院乃尊祝王画ハ土佐古将監光信）あるを。近来二箇度まで。かこに石れ
事ハ。祝ひまうをぬ。未曽有れ勝孫なるも。

凡急れかなれど。今粤に記せも。中く恐あ
ると。洩して刻板せざる。勢通会仏再興述言
れ中ふ。筆記し畢ぬ。

○斯て鞍る寺大花院ふを起て。勢通会仏再
興今式といへ弘法寺を開闢し。毎歳四月
四日毘沙門天王。諸天善神を勧をありて。其名を記し
於て一巻を。良忍上人よ授與し給へる。月日なきなり。是
を執行ふ。其起首れ年四月四日法会早く。翌五
日馬山より。山又山を越て。大系乃山上に詣し。

師よかの系成れあ〳〵を演なり〳〵かど。随
喜感嘆し給ふ。此もるにもれなくてのうま
妙ふ。抑毘沙門天王ハ。観音薩埵乃再身なれど
有位乃京生に。福壽を與へ給ふを孫にして。会仏を
す免。浄土ふ生せ〳〵め給へる。師本系なり。然る
を足下に。未曽有れ大系を發起せられ。今其成
満乃日を得。高尖の市入去れるに預られし
感喜ハ。宿善乃因發にして。何乃大幸ぞこれ

たうむや。依随喜乃餞わ。其賀れ微志を表ぜん
と。匣底に秘をくれし物ハ。是昔日富士山ふして。
空粹仙人の附し珍ふ。持蓮華れ其一本なり。機
孫相叶ゆよつて。入う授け早。我在世れうち
も。骨肉きわさも。執睫ハ更なり。来由をもな
れうこ語るべうば。命終乃後も我心をうき
て。是を慎べし。教誡厳密ふ仰せあるて。是
を附し珍ふに。謹ぐ答。我も亦住世永かるまじ

きにつて。先没後を思慮に。たうで親者れ大
像を彫刻し。人志ふきば。持物乃蓮れうちに。此
一莖を鋳て。壇地ふ安置せんふハといへど。師乃
曰。一理あるに似て。悍る所あり。必止ね。此附
属我心して。思ひよるにしをけうば。其所以あ
ると。直に位ぐてうけらるべしと。附ふ余察に
らくもで。先二莖を得珍ひしに。龍神乃懇求
に旗ぐ珍ふ附も。空仙れ許可を得て。将ふ授

殆ふとくや。今師は佛言乃末。うれよ号しく堂
得しくで。信肝よ銘し。嗚呼希有乃善孫小
あへ弘世に二りもさたもきれなりと。恭
拝載して。瞻仰しまるに。幾千巣は古物とハ。えるる
からもるに。其形筆はごとくにして。色赤黒なり。
長五寸八分未敷蓮の廻一寸五分。莖乃本圍九分
半。其の目四ふ五厘あるに。外巡を改ふして。荘厳
を施。享保四巳亥は春。是を衣裾よして。空仙の
遺跡乃所くを。尋ぬるに。涙恩を謝せんが為
に。西國三十三所観音大士堂場は順礼も素志を
遂。倩上来は津くを思ふに。我佛因孫なるて
あらぬと。歎き。又慚愧乃衣を顧るに。世
塵を厭ひて。内ふハ僧徒は数よ入るごとく
なれども。捨るハかるる世乃なりりにを
うりされ。且業障乃黒雲おかふが故よ。世網にか
うるて。未出ふは境界を。全せざる事を。あれ

がちゝ發奮し悔る涙乃かたを得ざるを哀れ
とや覚しきん吋ま師是を許し改て利度
乃作法をもしさし免許ゝ。維吋享保四巳亥歳
二月十九日なりと。あひたゝぐつく書も一女
を。是に同じ。彼勝尾れ世如上人乃。其父母
れ賢きあるを成おうを聞くもあるゝ。孫
に帥よ投帰して。愛河乃渡くまもれまも
やらで。もてなすする女も共ゝ。一吋よ家を出。

同席に二人姿をやりして。衣を墨ゝ染なるを。
なゝ初いとひ煩悩ハ。捨て菩提乃法門よ入
ぬるもとく世乃かゞしも見ひやられく。なよの姫
しされあまるて。袖をぬらしつゝ乃赤敷蓮花
も。我ゝに落し。位感涙うらねを貴こ且帥
乃誡を慎て。我方さ乃尾笠にも。涙く然
して。年を強に同じ。於六年辛丑三月に。尾
寿位奇なる感夜乃有し年ハ愛にあらゝよ。

記せば。其事跡仙授薩埵未詳未扱行未お蓮は故有る。今
高尖乃寶庫に記と共に封じて。秘をなせあり。
○又世に普く流通する。十万人講会仏乃發起は。
正法二癸巳年春乃比。余佛前に在る。初夜れ
勤行をせに。聊睡眠乃催にと見る内。夢う
ゐれ見まへなく。趣向れ前して。仏地浮世
乃夢乃覚ぬる様に覚し。さらに初恩院四十
四世通誉岸了上人。其比る未新田乃大光院

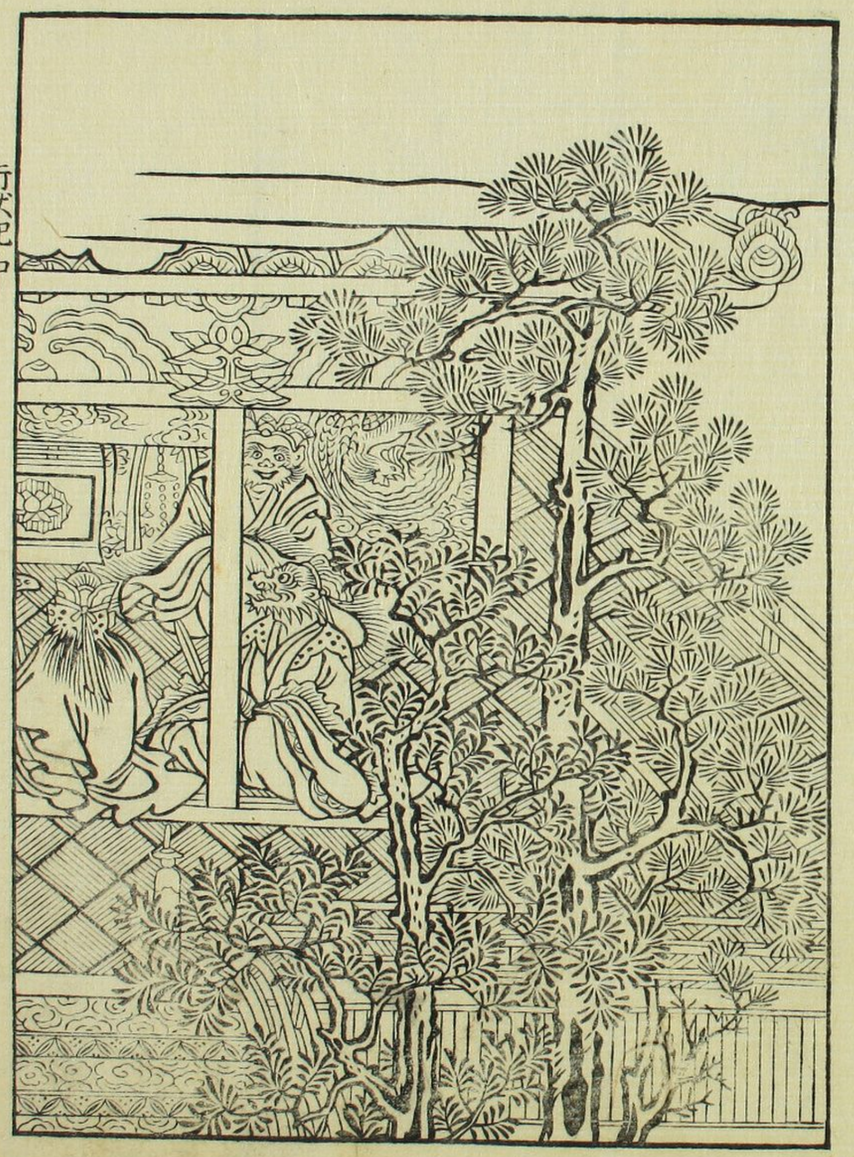
れ庵を結び移る。東武乃旅館に日を重ね指
ひ一時。密に往そうかぐひ。祐天大僧正三孫山
往ゐる南くけるに。啓達して一切時いる
まきん。新乃まくに満足次。其事実に具にハ祐天大
記に異述れ。僧正義感上人勝令
此書未扱行。然きざも其ころほひ。余生俗れ才ハ。
法れ為れざる。四方に名乃ゆえあらんを慎こ
思ひるに。南山れ所謂佛と法乃二宝ハ。僧に
あらざれば。ひろまらぬとある。格云を添く伝

じて。暫起首れ所以をぐ。遂して他ふ不洩と
かく此法光乃化益。天下にくまなき事成
形ふに。事我先祖代これ墳墓をしめ亞し。勢
州松坂清光教寺。其時乃主盟。善誉播貞和尚
を發起れ任とくめてく。披露し紀ふ。
花洛関東れ高貴あまく沛入舎ちく。これ
中。淺うぬ護法乃沛心をよせ世ふ沛
事ども。なるまて。日ゝに盛むふ。四方れ國廣
く流き志きるによる。猶し進ぐ。清光寺ふ十
萬人講堂を建ぐ。番匠花洛甲良宗義中に一切強須弥壇迄之彫物同人
を寄附し。是を函ふ盛。函之彫刻八分字　峭壁堂梁尚強筆
法燈を挑。本尊ハ阿弥陀佛　仏工法橋瀧川順正作　を安亞
しまる。左像三尺。たゝに傳大士。右ふ祐天大正面蓮
僧正乃肖像。各佛工法橋清水友学作
聚塲れ額ハ。幻華南谷律師乃筆れ。後門釈迦之画号及
天井之絵ハ　且此一宇れ元由を筆記し名ばく免る。
山本寺房
蓮聚塲記。湛堂法五撰述　此書未板行　又入會れ位印ふて。

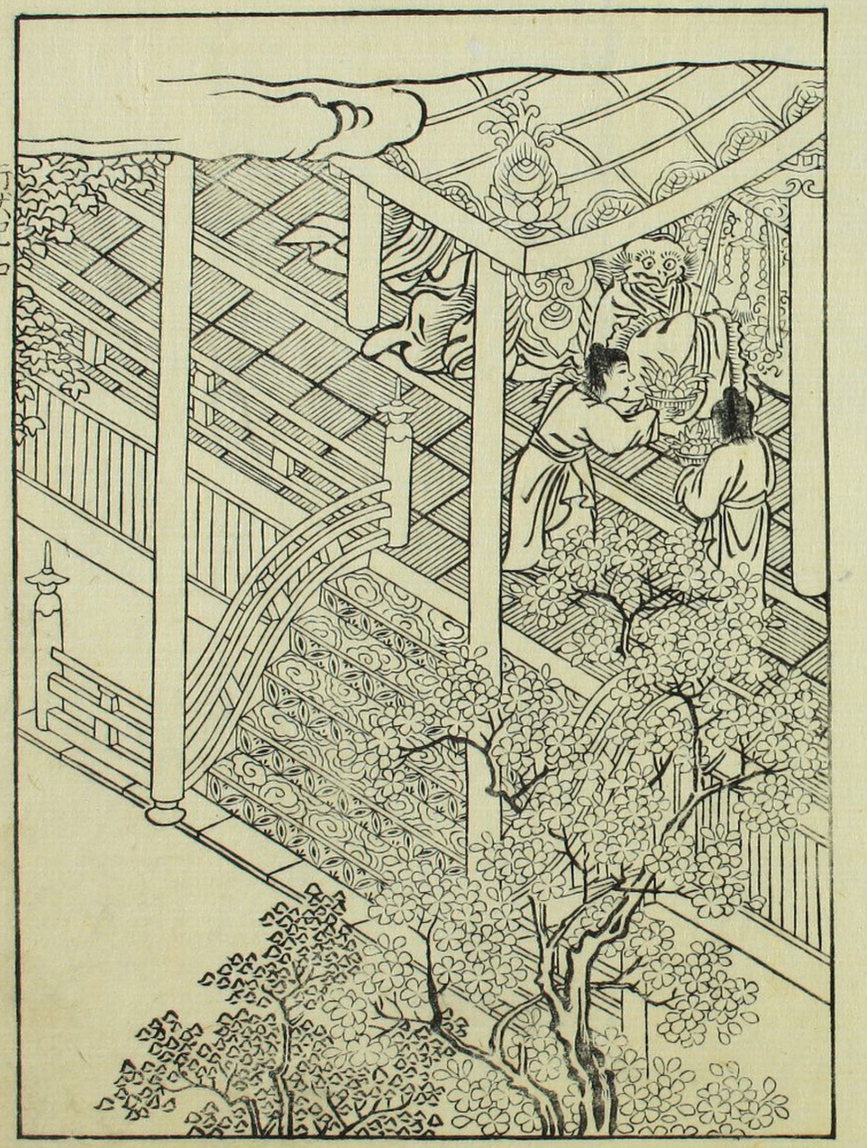
祐天大僧正の名号を印施せるを。今及んぐもうるに。凡百万称。乃受持の人名。漸つむで五十万人あり。於此十万人云。及上に演る所れ。余が再興せ。弘通大会仏の勅化よりて。命孫乃後も。子孫れ任として。誓て未来際よりとよばさん。且彼十万人。今住印れ名号。家よりの国に伝く。壹演功徳あることあげてもうるべかぐ。十万人。海感直記に。つまりを記とといへど。百にして僅ふれ一二をも不及。扨此十万人。今を。余が發起せ。特乃うちくれ趣をも。時に師はあるかぐ。先知らせ給ひそかぐ。学ーこれをと。志願を実に随喜ー。孫人。爾ーより。師に謂ひて。法を求る有位乃人。此会仏を勅進ー。孫人。嘗山上より詣せる人。数よりを。師れ受取させ。印施名号れ数。甚多さ。怪れぐ。月日を経て後。事れ孫よたよりて。特れ為をとひなれど。

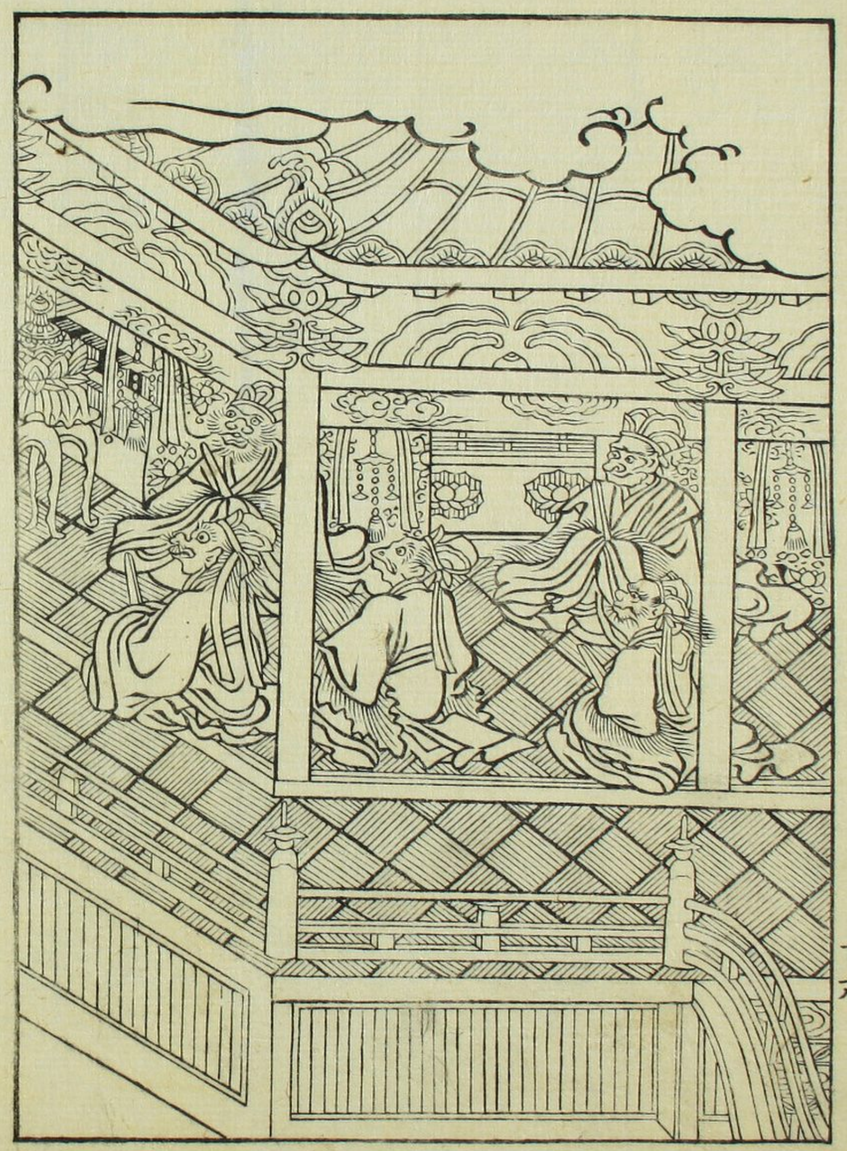
流石法く見給ふに所なくして。密に語り給ふ。空鉢仙人。此山に来現有て。十万人会の念仏を。すゝめ給ふこと。限なしけれども。此云ハ。慎べし。且龍神出現して曰。往古より此かた。念佛の教をすゝむといへども。此十万人念仏の善巧のごとくなる。天竺震旦にも未だきかず。此善縁を願くハ我界にも。篤く是を志さむと願ひしに應じて。幾度の名号を授與しあたへき。或

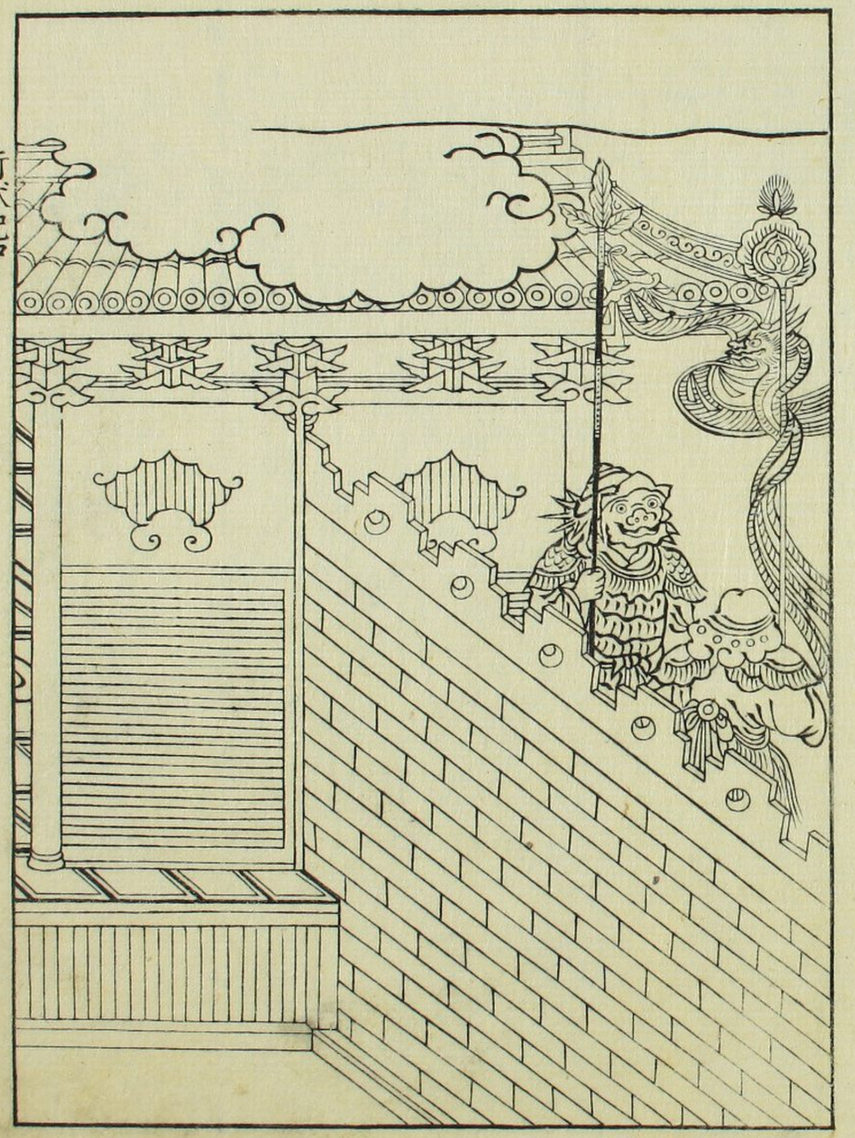
時濵龍王現れて曰。妻子をともなひたる因縁限りありて。此師此世の縁はさらせ給ふ後も。我界にハ。永く十万人会の結縁をのこさん。依あらかじめ。一宇の堂を經営し。その中央に。白金をもて。絶妙を盡し。塔を磨き造りて。龍宮にハ。珠より白金を重んじと。内に十万人念印施の名号百葉をも崇めまゐりて。かの界の衆生入会の志あるものハ。その堂に詣うでされど。日課百遍の誓約

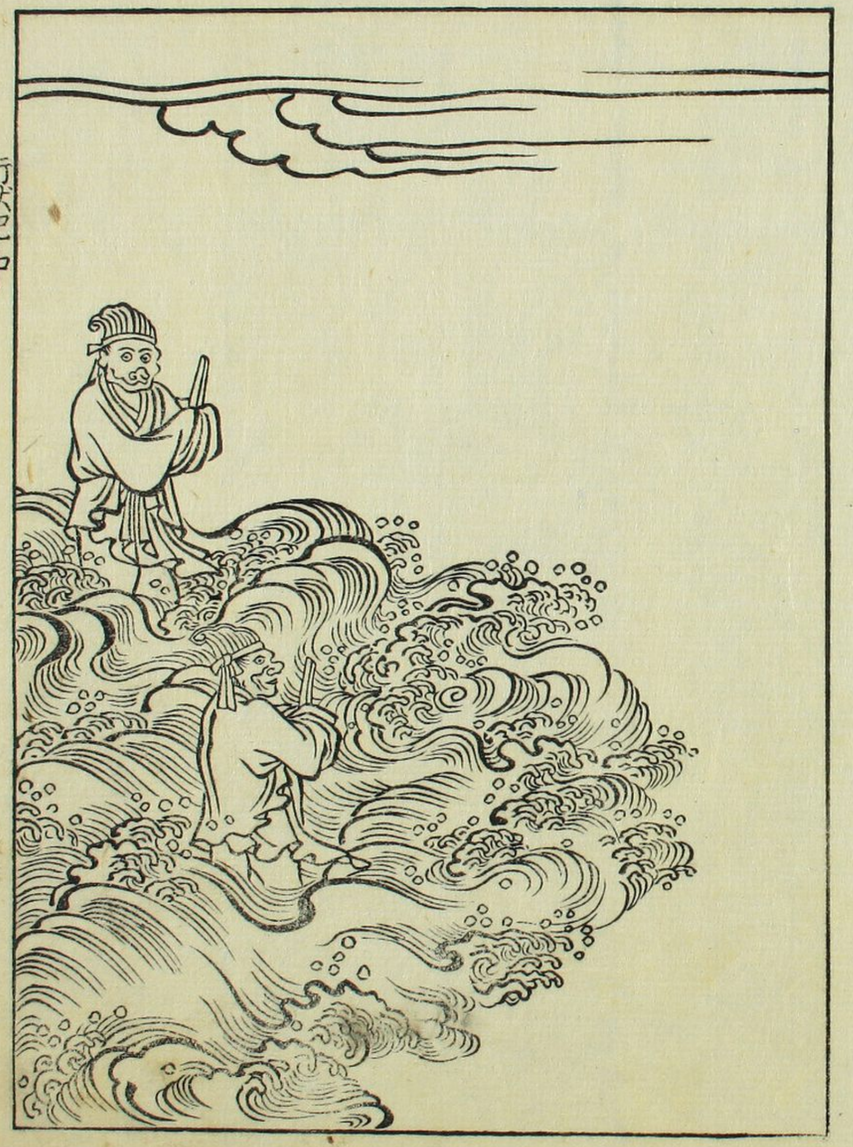


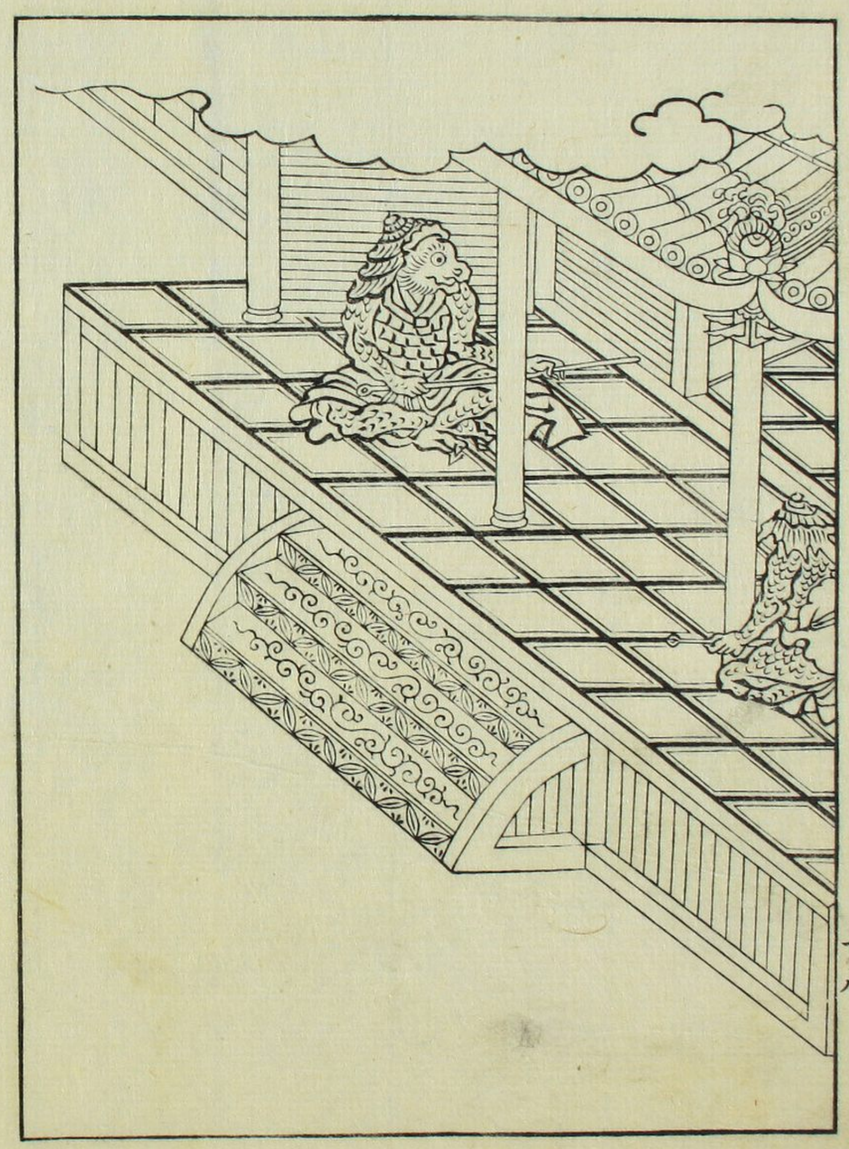
をなすさまを見て。則結庵乃法を宣しむ。世あるは
今より後は。別に名号を授受するに及ばずして。無
量の勝舎とはなすべし。是併当師乃恩賜なれ
ば。粉骨砕身にも報ずるにまらざると。謹ぐ
悦をのべらまと。扨彼激坊小荘厳せられる
堂塔を。守護の龍神。若干数世口あるまして。威儀
厳重に。恭敬乃如法なるはまま。例とくれく学えし
かと。語り給へ。











○又近比やごとれさ高き業。此十万人含ル沛入京
ル沛事あるを。怪あまてで弟まこれを記さば。
恐禁しきわて。沛同行ル諸人を随喜ま功
徳を添へ。歓躍したまへべ。
○上来鬼山神及天狗等畜彩祇二百ル京類。沛乃卓たる
百ル小帰し。入會会仏乃誓約をル。印施
乃名号を授受とる。有情を演説ひくれうへ。
文に又宣ハく。鬼類適こ此法乃契を結び得て

ハ。肝小徹る計ま。歓喜しきる涙といへども。業
障覆所有て。会仏乃数適を勵むるかこ。
かの餓鬼ル眼ま。飲食火炭と変じ。水を
求るにも。忽に火と化ゆるごとし。ちまて
百劫を勵修とるハ希にして。漸十劫
小満ざるも。多くなち。但かの天狗ル業。佛
法小障礙し。人百ま小仇をとゆて。人これを
恐怖とといへども。うれ中専三寶を仰ぐ

一切乃善根を修ること。亦多切なり。浸来其
業感ハいうむともすることを得ざるを仏法
ゑべしうきがゝ凡人身をうけあひゞ仏仏
れ本形よあひまるゝを得て。会仏ることハ
ゆゝるゝまでも。はもゞるゝこと歓喜せば。又勇猛
に励ざるを悲むべし。それ冥界乃亦類。かく十
万人去に入て。勤行を誓といへども。其境界異
ゑあふ。人百に等く。入去れ名を記して。幽よ

ゆゝ死ぬ。此界ハ通ざるゝを得ざるまゝ。
上来るゝが請ざる所乃名号を援しハ。萬をりて
数べしといへども。其行方を知せば。永く未審
を残さるべきゝ。是末代乃奇異にして。凡人更
ハ信ぜべゝ。疑ゝを。若誹謗せゞ。其罪恐る
べし。依く慎して。聊も是を演ば。抑れ毀誉を
ものゝ少して。ゝ入信施を厭ひ辛苦して。
兼食を丼ハ。静ハ往るゝを思ひよすれば。皆爰れ

きやゝれ額ハ老れ波を去て尺て。已所歸近し。
今何乃求る所乃有て。其者を語らむ。足下そ
れ我心を知る。我又足下を知る故ハ。法乃縁
初て是をかゝるもわさゝえ侍ハ。
○又勢州白子桜町れ利兵衛といふ者。享保二年
九月四日ちゞ免て帥ままゝ。作礼して十念を
受。更に十万人会れ。功感莫大なるを支得て。
別入会を希ひ。印施れ名号を授して。添く

さゝを任敬さと。爾来日課をくゆゝなく勤行
ひ。他境ハ去びゞちハるハ。必名号を膚乃守と
崇る。同じ紀三年れ夏。黄金百五十ま也。紀
州尾勢れ郷乃ゝれゞれ許へ。他ハやとゝま
く。専使乃任ハおゝむくに。えぐなる玉ぼころ乃
をにして。賊雑を除むゞ為ハ。金財布れ中へか
乃名号を安ゞまりまれゞ。其財布を腰にを
ハも。名号れ威壇を。恐れゝとゝ尺て。荷物れ

中に納まる。乃ち古里といふ所に渡あり。便船
を待得て。京らむと休らふ折しも。不図思
ひ寄ぬ名号を安じまる財布成。其佳荷物は
中にまぐれ入ぬ。踏越るすべ
やあらんと思ひ敬ひて。是は取出し。あにこの
かゝはりまて無ぬ業。由縁をゆるがせにく
しかくして。ほどなく向の岸より迎よれぬ。
俄然として暴風いとゝ吹。已ぬ此船覆らんと

おけるゆ。漸く風和く。爰に人々かゝる目を
見て。危き命を助るぬと。皆一同ぬ悦乃眉
をひらきける時よ。利ぬ我さまを持ぬる財
布を。先乃風波ぬ周障てや落しけむ。ふれる
ぬ見しをたづねまゝ求得ぬ。ちくいぐぜんと
思ひをして。歎きける。所詮此財布なくて
ハ。生死乃ちまるにかゝるまぬと。先の疾風乃ちど
ろくおちさ。鰐乃口ぬ乃がまて。亦虎ぬ口にあふ

んちして。あはれを感じ涙なるさまいふにも
まさるべし。今はあるべきまとは思はねども。悔れ
涙よ。漕来し方れあとの白浪をえやるに。勢
驚くる我財布をおぼしたれ。漂零やうれの
あやかるまきん。沈こやらぬをうつけ。いえう
ことをしひ。をもりて。船主をかくしひ。舟漕
戻れよ。ゆゆふ。もれく。ひさ家財布なりい
るに捜揚つるに。鍾さも更かくらばるなれ

ばは不思議といふもあまりけ嬉しさに。人目
乃中小。財布をひろぎ見るに。封乃まれ
黄金なり。豈五百れ用脚。且一通れ書。皆悉
水小浸ひたれど。奇なるハ。只名号の要くる
ま。水よハ毒も湿ぬ。現然として見えを珍へ
ぢ。歓喜踊躍して曰。是全名号威強乃たよ
をれるもの。感涙もるに。同般乃人こを。是に
驚嘆し。甚増信ぜ。仏ぎれ名号も信ぜれ感ある
事なるべ。まれく此十万人

舎乃名号を敬ふ人ハ。必法神乃守護有て海
河すゝ難を乃ぞうむ。其夜これよりあくれ日し。又おれ
利帝大系にちうでんとんざゝく。過し春三
月廿二日。風よ我屋を出て。同廿四日。洛乃三條
け橋乃邊ふ旅宿を。其夜乃夢に。大系ふ登
峯し。師をおして十会を受し。宣く。往年
ち十万人講け名号を授早ぬ。今ハ又舎利を附
與をべし。送身乃舎利ハ。ちを佛滅後乃為
ぞし。ひゝさちに位敬し。おれぞ。二世け悉地

を得。且胎孫亦会乃益をかうまれぞと乃
孫ひく。則一顆け舎利を物ふとれぞ。うけ
ゝく驚覚て。夜の明ちよ。夜を孫に寝覚ま
床ふ。東雲をまちうねはく。宿代出て登脇
し。御菴け南座ふ跪き。はく志んぞ十会
をうけ孫りて。頭をあぐれぞ。現よ膝乃前に。
白色乃光る小石けごとくなる物あり。爰に思ひ
よる感夢ハちうきぞと。いゝぞ拾て。はゝぐゝ

又に。人乃歯なれば。怪ちこと。法菴ホハ。孫
ホ仏ハ弓形舎利等ハ。更ホ安置し珍くるに。
是ハ決定弓師乃法毀歯にく。前来に授る
ホ舎利ホらんと。歓喜伝了して。則手
にけくくく情ホし。作して下向乃後。恭
舎利塔ホ安じく。仰ざまるに。をろげこの
師ハ呼ら法ホ。其郷人を伝知して。孫を持べ
ホ中ホ。程時乃人。是を拝さまて。此会往生
乃巨益を得。且現世ホあげうもる事。すく
なくらば。斯いち志ろ紀世ハ。往こに有ば。記
ホつ法。今師乃ごとくさハ。実ホ得定ハ人
なりといへども。祐天大僧正ハ老体を仰ぐ
法さ世珍ホ法筆ハ聖号を。手をして請受法
ひく。是を内ホ敬ひ。宜もかく法名号ハ化善
ホ多くみし珍ひく。酒壺なくせ。ゆまへ。
師乃法光に感和して。此名号ハ蓮益法鼓を鳴

し。化をもさ行ふあるんぞふや舞ものもや
に者。誠をもてもる時ハ。ひぐきれ参にもるが
ゑる感應あまでなるそれ法を孤り弘ま
らば。是を弘むるこ正人ふありと。誠なる哉
此云。かの名号れ功。妙色なるがごと。師乃左
世ふをまるや。其乃よまつさ暴ひく。拔苦
與樂乃益を待びし。幽顯の類又無量あるん。
されど師生平山谷ふ森をさ〻こゑて。自行

を本と〻。法華乃実よりまや亦紀靈異
は。曽演説し給まば。余ま半に因て。切ふ
こひ〻てまつるふハ。辞ふる不なまて。希に
語りまえたまふ。其能乃威強ハ。漢れ真砂のご
とく〻多ど。説給ハざるハ。例乃ち慎なれば。
強意を抱きて。玉ま法ふ地して。邑し伏ち
ぬ退く推勸るに。師ハ不惜身命実脩大乃
法送るれば。宝ぐ岩ふ頂沙乃諸仏。無数ま

菩薩。一切乃天龍等。隨逐護持。ゆらめさ
まざまこと。終に病床に臥ひをえず。所ゝ
居も。奇峯小嵐をげしを。雲旁立昇る幽谷
小。年を経ゝまの如といへども。寒温にも侵さ
れず。猛狼毒虫も。慈悲の情になれくや。燒
し得ず。年よわ草衣に身をまとひ。盗賊
に恐なく。三昧定に自然智を用ひ得て。内外
共に教典を暗じて。壷奥を事理分明に論
じ弘へば。自利利他乃益を量にして。不可説
乃法を成じ弘へば。されば般舟三昧経一巻之本擁護品
其中に如法修行合佛三昧乃益を説ゝて如
是行者。今世即得五百功德。如慈心比丘。終不
中毒。兵刃不加。火不能燒。入水不溺。不害。正使劫
盡燒時。隨是火中。火即為滅。喩如大水滅小火。菩
薩持是三昧者。若帝王。若賊。若水火。若龍夜叉。蟒
狗子。虎狼。枷鑊薛荔。鳩坛。一切毒獸。及鬼神。欲

殘人の欲殺人。欲奪人衣盗壞人禄奪人命。故欲中是菩薩。終不能也。除其宿命不請。如我語無異也。佛言持是三昧者。終不痛目若耳鼻口身骸心終不憂。除其宿命所作。佛言是菩薩為諸天神及阿須倫夜叉鬼神。迦楼羅鬼神。甄陀羅鬼神。摩睺勒鬼神。若人非人。皆共讚叉是菩薩皆共擁護。諸事供養。瞻視敬仰。思欲相見。諸佛世尊亦然。是菩薩所未聞。持是三昧威神。悉自得之。若晝日不得者。夜於夢中。悉得之。佛告殿陀和。其有持是三昧者。我說其功德。一劫復過一劫。不可盡竟。略說其要。爾三卷乃強。よハ。偈頌。あるて。文委悉也。演べまゐる。佛。猶此三昧乃功徳を。窮盡。たまハぶ況凡夫を以て。敢是を測や。若実に其徳を知らんとおもハゞ。軀命を不顧。如実不修行。てみげうゝ是を可信。知。れ魚も水を樂こ。ゑハ林を離ぐよ。其魚ゑ水あらざれば。

水林乃樂しうゑたるごとし。今師れ
跡を追きく山林よりのがれく。積功累徳をれ
さぐ奇跡霊益ホくかくれごとくならん。修せ
ば行もぶして。まれる其功感乃分際をもち
らんや。但不惜身命れ会を決せどして。山居
し勤苦せんるハ。甚斟酌もべき事勿論なり。
或説をあぎく長明乃曰若人佛道を行れ
りん為ハ。山林ふもはゆどいる。獨曠聖れ中ふ

もたくむ時。粉身を恐れ壽を惜ん。あらぐ
必しも佛擁護し給らんとハ期むべうらば。垣墜
をもかこひ。道ゑべ犯うまへをして。自分を守
ま。病をくゆもけく。やうくすまんるを。
死ひはべ。若ひくさそ佛ようをつる身
ぞと思ひく。虎狼ちるさて犯をも。あ
なぐちに忍ゑ乃れく。食物を絶く飢死
をもを。うれをしかるば覚ゆる祖ふるわ

なれど。仏も必擁護したまひ。菩薩も聖衆を乗わたす。守り給べし。悪鬼も毒獣も便を得べからず。盗人も会を起してさわ。病も仏力によりて愈なん。是を思ひ入れ心。ひとすらに仏天の護持をこひ願ふ。あやうきをすくはんと語り伝へ。世をすくはんと学ゆと云こと。まよひて思ひ出すべし。師又或時乃宣ひしは。山居年を経まで。覚ぼ山氣ひとすらに感通する理有る。尋常ハ耳ふれも觸ざる。言語乃通ずべからざる類も。釈眼耳に入る。あやしきするに足ぬ。ふるふ支往古六根通を得たりと云伝る人有。まれにも其機を雑ふべし。雲ハ雨と修る人也。いまだ是れ得る所ハ孔しといへども。亮樂の清信ふして。行ずるところ。勇猛に功を積ハ。漸世業をたすれるなり。冥界に機感ど

く随仕し。或る未前の事を告ちらせ給
まくひ弥うゝば。然るにうれをして六根通得
乃機不混ざるゆ。甚非なりと。此ことにをける
初らば。師も亦六根通ふかあゝで。其等者
ゝと。ちゝ見て。けるまへ給う。且ちゞ免相
州曽我山より入珍のよりゆ。孫を大系山ふ至て。
三十年ゆ睡眠を更るゆ。縄床なんどふよりゆ
く。頂刻もはどろこと珍ふるまさへれうき。世

人れ不臥を誓て。脇を席につまざるゆこれ
類とハ。異なり。光明大師。睡眠を除去て。二十
年と伝る和ハ。未首有なるべし。

○享保五庚子れ秋乃比師余ふ示て曰。羊れ歩
近よりて。今幾程も世を強じと思ふが故に。
頑迷屈にぬれよれはね。陰陽乃四会をも。求
死まば。紫雲異香乃勝瑞を。感ぜばやと
を祈ぬ。只佛乃本願を頼く。会仏乃恵て

はさまる。往生を期するのこゝろさしい病苦
逼迫して。起居進退自在なるべくもあらず。看侍を
たゝくいたゝわゆゝるゝ。況其外の人
をや。但訃音有だ。皇下愛に来て。没後其
骨を。海法し給へべき様ハ。袈裟衣及肉衣
をも去て。骸をぞ蓙やうれたるのよきくみ
かゝぎて。薪ハ菴を崩して共ハ空しさ
烟と成給へ又骨灰をぞ。山下なる澗河の瀧
の瀬ハ流さるべし。且宝肉ハある所の名ハ
きハ蔕れひとりも皆ゝこよわよせられれ
ぞ。悪匠し送る所なゝわ。亦禁の寺に位牌及
墓誌など。假ハも立給へるゝ。遺事此外
なゝと。余師命を審知して。自已にをける垂
帯も。やゞて才にゝる珠数の玉れ緒にたゝび
涙のこぼきかゝるよ。むせびくゝものをもいひや
らゞ。師ハ学れ西ハ秀むとせし。貴ゐれ二業

より芬郁たる薫ひきたゝして。一切世塵れ伊蘭
なすごく生ぜて。終に梅檀乃香を。閻浮乃化孫
老ぬまでゞ。烟ふなしたまゝべき事ハと。且無く且
貴くも覚えて。なしく咎ハ。高老あと
くの御行れ師生ぜらゞ。弟子るとれくめい
ぎくなれゞ外をかざりて。をりゝ人情に
ちぐひなんゝ。鈔を塚に抜し例も。よろれ
らゞ。此遺命ふをゝ。違ちべらゞ。但御

菴乃こハ。朽ちつるふゆゝ世塵て。破却乃一事
も。許し給へ。後まれよちに来り懐齋して。
会仏するに。其侵ともなしゝむといへゞ。微笑
して然受し給ふ。同じ紀名ふいるりて。時函
まぐらふ。紅葉散透嵐将来紀をれゝ。ち
しを厳かゝぬを。師も例よりを堪がゝ覚
え給ふゆゞ。依身れ限ある事成初んぬべ
しと宜ふ。扨此山住も亦年越て。祉なく五回

乃春を迎たもへと。是帰舟乃近き日はもれ
どゝも。いさゝか煩悩もれくて。胡舟竹下生平に
変ぜてもみえんもまくこゝ。
○二月三日れ晡時に。蘇乃寺主。沸菴宗訪ハ
きをるに。師茶を饗意して。時をうけ
給ふ。寺主煙乃傍なる水仙を乃て。ふもい
げこゝろ得させ給ふそ。寒氣を強て咲る。
此花の色香もかゝくと。攢らまれぢ。

まてゞとよ。観音浄土れ荘厳乃中にも。多く
水仙をゝく。家とせらるゝと聞え給へゞ。
寺主乃曰只浄土といへゞ。皆蓮華ゆゝと
こゝて思ひはるに。孫安も承るゝれ者。師
宜く。蓮華乃仙乃外に。或も菊乃多き
宮土もあゝ。或も牡丹乃多き浄刹も
あり。浄土無量無数なり。草花乃ゝれんで
一種よかゝらんや。但安養れ功池よハ。専蓮

華あつて。えれらぬさま。諸強よ敬服しる
まつり。其微妙乃花をとゞ身も軽。浮世れ変
乃曙よ詠る。蓮華初開樂ハ。豈快然なるざ
らめや。且こゝ命終小臨まゞ。此座を去
くそこに座しそ。滅をさらぐやと仰らま
しに。寺主けく何乃佳乃ふやと。異さまて
云れして。下山せられしゞ。上来師乃仰の恢
しかるけと思ひ出る。翌れ日辰れ刻。寺主

又登山せらるゝ。ふ。戸ざ弱へど。なんしを
例なるに覚えて。嘆きれどつたからぬ
ふ。扉音もなきれ。はまてよといぶ
くて。やをら戸をひさあるに。師ハ果し
く常れ座を去て。西れ戸内小坐具を安。
結跏趺坐して。顔貌笑るゞごとく。合掌乱き
ぢしく。坐脱一弱の。胸狂煙氣あり。察すら
く。卯乃刻もうれ命終なるんと。時て

壽算満七十。実ハ享保六辛丑二月四日
なり。余告を得て急ぎ即日登
峯して。師乃西ハ方ぬけ殆ん。微笑ませ
給ふ。侍者を招き退く。悲法をもつて豫今
明日ハ。示し殆ひんぬ。思ひうけざるにも
あらず。法燈永く爰ハ消ず。園よりゆどへ
永遠なるをくれまわりてハ。殊生又いづこ
にかゆくらむと。才をもつる爲ハ。扶を志ほり
はゆかくてを有べきなり。移ぐ。去年れ
遂屬ハ任をく。翌年日
茶毘乃作法城。
侍菴宝れ前よりすまわぬ皆
天氣稍和ハ晴るるく。
化孫乃勢ぬる名殊を。
空ハ示しまへる
ハや。爰にハ

異なる流の紀を

みそなはすを。

此山上にあるにて。紫雲の

靉靆たる中に。遥か

境を隔て

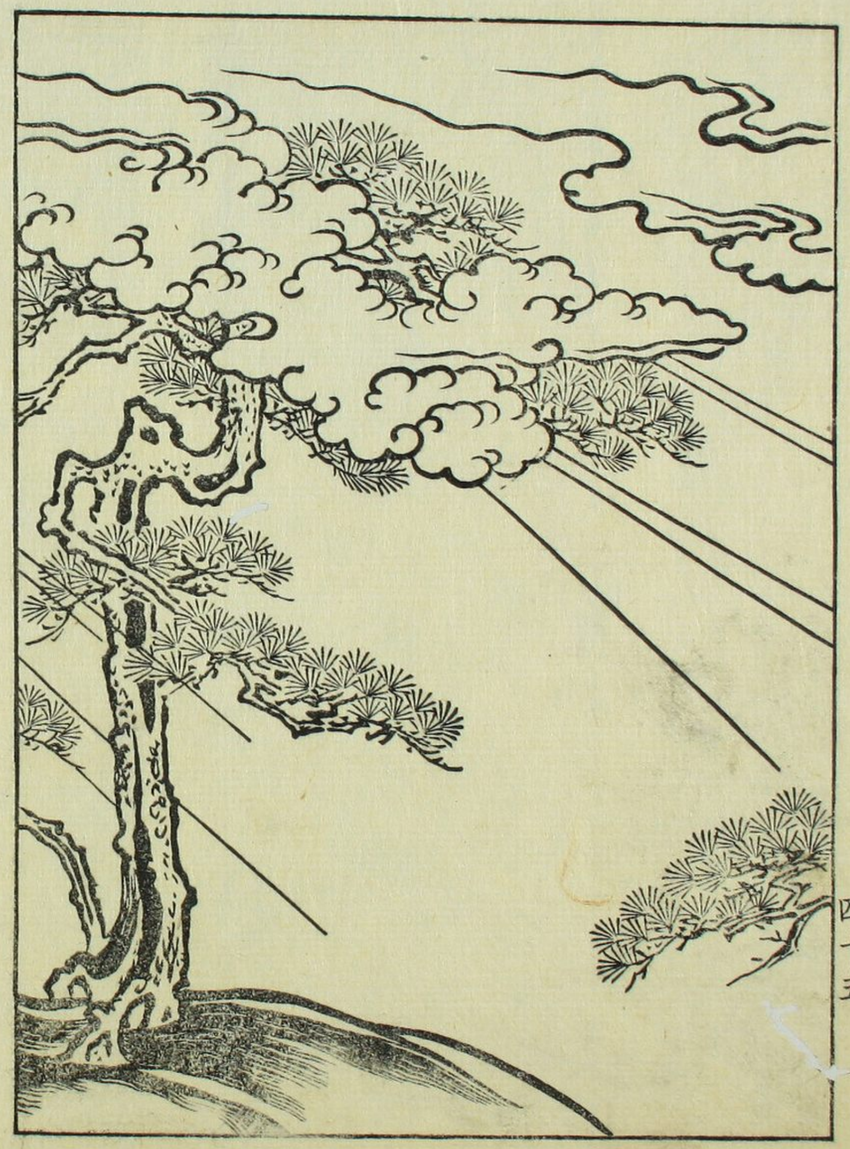
空のそこに。

他日告来る。

往くこなすと。

古來号天狗之坐

彈誓上人鉦掛松



○師當山ゝ移らせ給ひし時。里人多く孫枝
したてまつる中にふりまぐむなる老婆乃い
はく。我祖父生世ゝかくしかゝ此山の開祖孫誓
上人遷化し給ひ時ハ。我いまゞ幼うして。此
郷人ゝ多く眞借しまるに。教示し給ふく。
汝等いとけなくして。ものくるゝ時。我極樂ゝ住
まゝ。久からずして又爰ゝ還來せん。宮ん
でうしらぐむまごれ時なる氣べーと。宣給

なりと。さに今師乃景窓を見まるに。一井山
上人乃法自作の法報よ。嘆もたぐそ世殆
ぞ。誰こそさハ和こ殆そぐやといひ。
愛をれてもんぬ。師ハちまうがふ爲くも
なりき。弾誓上人ま再身にておりゐを
孝とと云く。弾誓上人ま。天文廿一壬子四月十
五日。尾州海部ハ郷ハ出生して。慶長十八
癸丑五月廿五日。當山ハ示寂し殆ふ。且未曾

有不可思議乃事実。祀して當寺ハ孫起に
あると。余又上人行狀和讃を製して。刻板
流布せり。

○
於戯師初發心乃昔を思ふに。卓きる道心
内小催し。世を一筋ハ思い切。愛河を渡り
て。巧小人をして。訃音を父母ハ啓達し。自
花袈裟を刹。業を受らふ。ちまき暫恩を忘れ
て。其恠ハ肖くに似ちといへども。孫ハ跡

を山谷にくらまし。日につぎよりふい祇ぞ
して。此大乗を成ぜるふ。身を法門よ投う
けく。積功累德し。一朝乃雲路果然こう
て。三昧を發得し。其德孤なりぶして。西ふ
鳴ぞよ響き。四方に布ぐ。身ハ奥山ふ在れ
ぐら。妄云にして法を説。境を越ぶく。化
導萬國ふ普く。剃ろれ蓋。幽顯乃類ふをよ
ぼし。且雙親も亟上得脱ならむハ。そも孝
乃大ひなるこれあらばして。何ぞや。苟
も大徳ある則ぢ。ふ節よかを成べらば。
可謂真実報恩者なわ必。
○師平日れ口號ふ。佛乃接と不接をも論ぜ
ば。只身を本願よ投帰して。念佛相續を
要とし。命終を期さること。あいこれ弘
法還愚れ仰位。是則蓮門心行乃源底なる
ぞし。光明大師ハ。莫論弥陀擿不擿。意在專

公回不回と。千福禪師ハ。廣餘一切諸願諸行唯願唯行西方一行と。勸化し。我吉水大師ハ。唯往生極樂ハ為ホハ。南無阿弥陀仏とヤて。無疑往生するぞと。思ひとりて。申外ハ。別乃子細なぐと。又佛乃教ヲ任ヲて。六字を唱れば。必ず往生すを弥ホとだろう。此外ホ別乃ムを發せぐ。本願ヲ遠ざるれとと。仰られたり。師此等ハ奥旨ホをける。況ヨ仏乃

口決を得ずまひなるにやと。いと貴くぐ覚えける。但其実ヨ據て論ぜぐ。師ハ。佛祖乃口決ホ順ざるもことにして。教いうむとれまでぐ。合仏乃利益を。愛に總ていたぐ。滅罪護念見仏攝生往生ハ五種。增上孫ハ外ハなし。然るに師ハ既ヨ得定乃人なれぐ。罪障滅盡ー殆ホるホハ。ホも更なりよれつね会ヨ夜ぐて。阿弥陀佛乃報土依正ハ二莊

縁を覩見し給ふ。況や稱念仏は即ち。稱
願乃光明一切諸佛菩薩百重千重に圍繞し
給ふ。等は護念をいくをや。鸞師乃所謂
能滿衆生一切志願とは。是古乃謂なり。加之親強
ふ見無量壽仏者。即見十方無量諸仏得見
無量諸佛故。諸仏現前授記し給ふとは。説れ
ぬ。もるべし。師は亦現は一切乃諸仏ふ。往
生は印可を直ふ蒙りぬまい。斯五種
増上縁乃中に。前三後一は法をぞ。悉成
じ給ふもらむ。然まども。報命未盡され
ば。第四摂生は益を得ざる故に。只往生は
一事をのみ期し給へ。宗祖嘗ては
まくばや。親音は達業ふ蒙るまでは。
爭案堵乃思ひは住せんとされば往生
乃外は。四種は益。皆業成し給ふ。決然
なるぞ。ほに未滅罪護念見佛等は益を

得ざる人。師は内徳をば知らぬにて。我は
方ふりを云なつて。師も只往生を期し
給ふ外は。文よ様を希求し給ふといふ
有。其僻見を信用する事なれ。今師帰
寂乃顕験世に往生人ふ。超過し給へ
る瑞相も。さるかるべきを。我業深く
障有て。終焉乃砌よはれしかど。おもる
ふ。霊白徴笑は面容。威儀もとぶれ給はぬ
して。御骸乃軽きこと。
鵝毛はなはだしく。
烟とはしなる
夕べを。奇なれる。臭氣
強くはし。
且諭
死期を
さろし先きぶこそ。

禁の　座を去　肴合
寺主了　く。　等。文
かゝ内ゝ　西北　筆乃
孫ゝ　戸内ゝ　及
ご　出。　取ゝ
と　正士　あら
く。　西向の　ば。

澄禅和尚行状記中終